表紙の人

第61回全日本教職員バドミントン選手権大会

一般男子シングルス優勝　内藤浩司（神奈川県）

ここ数年、コロナウイルスの流行は拡大と収束を繰り返し、さまざまなイベントが中止・縮小されてきました。教育活動も例に洩れず、日々私たちが接する学生・生徒・児童たちにも大きな影響を与えています。このように非常に厳しい環境下ではありましたが、日本バドミントン協会をはじめ、日本教職員バドミントン連盟、運営をしてくださった愛媛県の関係者の方々のご尽力によって、第61回全日本教職員バドミントン選手権大会を開催いただきました。大会に携わってくださいましたすべての方々に感謝申し上げます。

久々に全国の先生方とお会いできる喜びを感じながら、私たち神奈川県教職員チームも大会に向けて一体感を強め、愛媛県に入りました。その結果、団体戦ではエントリーした全ての種目で入賞を果たし、個人戦でも一般男子単複の優勝をはじめ、40歳以上男子単複、55歳以上女子複の活躍により、総合成績では準優勝という輝かしい成績を収めることができました。

今回は、その原動力となった一般男子単複優勝の内藤浩司先生についてご紹介したいと思います。

兄と姉がバドミントンをしていた内藤先生は物心がついた頃には自然とラケットを握っていたそうです。現在は神奈川県の私立藤沢翔陵高等学校に勤務し、バドミントン部で熱心に指導する毎日を送っています。

バドミントンを始めて間もない小学生の時、練習が辛くて辞めたいと監督に伝えると、「辞めさせない」と一喝されたことがあったそうです。振り返ると、そこからバドミントンに対する気持ちに変化があったようです。バドミントンを通じて「本気」に出会った瞬間でした。

目標は、常に「日本一」。ひたすら練習に打ち込んだものの、全国大会では何度も壁に阻まれます。悔しさを抱え、高校の進学で一大決心をします。「世界で活躍する選手を育成する」プロジェクトを立ち上げた福島県立富岡高等学校（現：ふたば未来学園）への入学です。内藤先生が入学した時がプロジェクト一期生でしたので、一年生から主将を務め、寮生活、外国人コーチの指導など、多くの経験をした三年間でした。バドミントンだけでなく、初めて接する全ての経験が人として大きく成長する時間と感じたようです。しかし、目標にはまだ届かず、最後の高校総体の県予選では本命のシングルスで出場を逃してしまいます。恩師である大堀先生（現：トナミ運輸）が一緒に泣いてくれたことがとても印象的で、【生徒ともに】涙を流せる教員になりたいと感じたそうです。

大学は日本体育大学へ進学。くじけぬ心に磨きをかけ、これまでの取り組みを結実させます。全日本学生選手権では団体、単の２冠を達成し、大東監督に「内藤は言われたことしか出来なかった、でも言われたことを吸収する。それが今回の結果に繋がった。」と言葉をかけてもらえたことを今でも覚えているそうです。この結果と言葉を自信とし、卒業後はJR北海道、日立情報通信エンジニアリングと実業団の世界で活躍しました。

引退後は、自身の経験を競技力向上に還元したいと各拠点でコーチしています。藤沢翔陵高等学校での指導はもちろんのこと、地元のジュニアの強化をはじめ、これまでバドミントンで受けたさまざまな経験に恩返ししながら、教職の世界でも日本一を目指したいとのことです。

全国の先生方、今後も神奈川県教職員チームとともに、さらなる高みを目指す内藤浩司先生を宜しくお願い申し上げます。

〔文責〕神奈川県教職員バドミントン連盟事務局　北澄拓央

表紙の人

一般女子シングルス優勝　有馬弥優（鹿児島県）

小学５年生で始めたバドミントンは、体力だけに留まらず、戦略的な駆け引きも伴い、実に奥深く楽しいスポーツだ。今は週３、４回、２時間弱、仲間と汗を流す快感を味わっている。出逢って14年、ピアノ、器械体操等と経験してきた中で、唯一続けてきた習い事である。

しかし、怪我や病気になり、バドミントンができなくなる時が何度もあった。アフターケア不足が原因であったと振り返る。

１番の怪我は大学四年の時、西日本学生大会の時に患った腰椎椎間板ヘルニア。団体戦の翌日、とうとう立つことが出来なくなった。後に全日本学生を控えての、集大成の時期だった。

それからは、死ぬほど好きだったバドミントンをする事は疎か、歩く、立つ、座る、寝ることさえも苦しみとなり、これまでの何気ない私の日常が激変してしまった。このまま一生バドミントンができなくなるのではないかという悲しみと不安のどん底にいた。故郷鹿児島に帰り、約１年間痛みと戦った。家族（猫、亀も含む（笑））も癒しと支えになっていたのは言うまでもない。手術は成功し、再びバドミントンができる喜びを感じる日々を送ることが出来るようになった。

教職員全国大会という舞台。久しぶりの試合、それも全国という舞台に立たせてもらえるということで、練習にも熱が入った。たくさんの時間を地元の最高の選手と共有でき、有意義な練習となったことに感謝したい。

まずは、ダブルス。前回大会の覇者、川原さんとペアということもあり、安心しながら楽しく、思いきりプレー出来た。結果的に優勝することができ、とても嬉しかった。次に、シングル。怪我から復帰後初めての試合だったためとても緊張した。しかし、１回戦、２回戦とプレーする中でラリーができる楽しさと嬉しさを感じた。そして、準決勝。１本ずつを大切にしようと決めて臨んだ。思いのほか空調が強くてお互いに影響は受けたと思うが、どうにか勝ち進んだ。決勝戦もやはり１ゲーム目を先取され、少し諦めの気持ちがよぎったが、試合に入る前に自分らしいプレーをしようと思い直し、コートへ入った２ゲーム目。１ゲーム目同様、相手の凄まじい集中力で簡単には決めさせてもらえずにシーソーゲームをしていたが、後半に連続ポイントを取り、ファイナルゲームへ持ち込むことが出来た。最後は気力で遂に勝利することができた。初めて全国の舞台で優勝することができ本当に嬉しかった。この結果を一緒に練習した仲間、応援してサポートしてくれた方と共に喜び、心から感謝したいと思った。今後もこの素晴らしい経験を忘れずに、仕事と両立させてバドミントンを楽しく頑張っていきたい。また、大会運営に携わった関係者の皆様にも心から感謝したい。ありがとうございました。